

3 東京都／石原 裕一郎(52歳)

母さんへの手紙

娘の結婚式に向け、妻が留め袖を出していると、押し入れの中から古い風呂敷包みが出てまいりました。結び目を解いて見てみると、出てきた物は、私が使っていたお負い紐と、寝ん寝子半纏でした。「このお負い紐には、随分とお世話になったんだろうな」と、母さんとの記憶の糸を手繰ることができました。家では昔から八百屋を営んでおり、当時はまだリンゴ箱を並べた上に野菜を積み上げただけの商売だったと聞いています。北風を凌ぐのは、立てかけた簾の中だけの露店だったのでしょね。未熟児で産れて身体の弱かった私を、背負いながら店番をしていたのですね。時代の荒波に揉まれた半纏には、母さんの残り香があり、温もりが肌に薫ってくるようでした。私も娘が嫁ぐような歳になって、やっと親の愛情の尊さを知ることができました。一人で大きくなったわけでもないのに、生意気な態度をして困らせたこともありましたね。私は今、反省しながら母さんの子でよかったと、思いつつお負い紐に触れています。これが母さんと私を継いだ最初の絆だったと思うと、母さんに愛されて本当によかったと感じています。人生最高の幸福は、愛されているという確信にあるということをお負い紐は教えてくれました。そして、私も母さんを愛せてよかった。母さん、私を育ててくれて本当にありがとう。